

地域の底力

弘前市



青森県弘前市常盤野字湯段^{ゆだんやち}范

悩み深き人々を受け入れる 「森のイスキア」を訪ねて

「森のイスキア」は、津軽の霊峰・岩木山の麓に作られた、心を休めたい人たちのための憩いの場である。

「森のイスキア」を主宰するのは八六歳の佐藤初女さん。全国からやってくる人々の話に耳を傾け、

あるがままに受け入れて、心を込めて作った料理でもてなす。

それだけで、人々は力を与えられ、生きる意欲を取り戻すと言う。

そんな初女さんの力を知りたくて、青森県弘前市を訪ねた。

取材・文 千葉望 写真 栗原克己

岩木山を遠望する別荘地の一番奥まったところに「森のイスキア」がある。細長い船型の土地は、最初に購入した場所の隣の地所を買い足して広げていったもの。ここはさまざまな人が乗り合わせる船だ。



自宅を「弘前イスキア」として開放してきた初女さんにとって、豊かな自然の中で人々を迎えられる「森のイスキア」建設は大きな夢だった。それが支援者からの資金提供によって叶えられた(上)。細長い土地は雑木林がそのまま生かされ、ゆったりと散策できるように足場となる板が設置されている。木々の香りを吸い込みながら歩くだけで、疲れた心が癒されるのを感じる(下)。



苦しい思いを抱える人々を受け入れる憩いの場

青森空港から車でおよそ一時間二〇分。霊峰・岩木山を眺めながら、弘前市常盤野字湯段范(元・中津軽郡岩木町)にある「森のイスキア」を目指した。岩木山の中腹は紅葉で染まり、たおやかな稜線が美しく秋晴れの空に映える。ススキが揺れ、黄色や赤のりんごがたわわに実っている。津軽はまさに秋たけなわだった。

岩木山の麓にある別荘地の、一番奥まった土地に「森のイスキア」は建っていた。一行を運んでくれたタクシーが去ると、辺りには人工的な音が一切聞こ

えなくなる。鳥の鳴き声、さやさやと舞い落ちるブナやミズナラ、白樺の葉の音だけが響き、辺りは枯葉のよい香りでいっぱいだった。「森のイスキア」を主宰する佐藤初女さんが、なぜ自然の中に自分たちの拠点を作りたいと思ったのか、分かるような気がした。都会からやってきた肺が、森の香りを喜んで深呼吸したがっている。誰にも言えない悩みを抱えてここを訪れる人々は、どんなに自然から力を与えられるだろうか。

庭には立派なブランコがあった。腰を下ろし、漕いでみた。高くブランコを揺らすと、木の葉を透かして真っ青な空が見える。訪ねてくる人の多くが、ブランコを漕いでいくという。し

ばらく時を忘れた。

「ブランコをここに作ったのは、私が子供のころ住んでいた家の庭にブランコがあったからなのです。父にそのブランコを作ってもらったときの喜びを、ここに来る人たちと分かち合いたいと思って」

と、佐藤初女さんは言う。

五歳のとき聴いた鐘の音に導かれて

初女さんは一九二一年生まれの八六歳だが、色白の肌や白髪には艶があり、とても美しい。これから取材を受け、さらに有名な「初女さんのおむすび」でもてなしてくれる予定だった。

え、おむすび？ と思う読者がいるかもしれない。日本人の国民食であり、最近ではコンビニエンスストアの売り物のひとつとなった感のあるおむすび。初女さんはこれまで、そのおむすびを食べてもらうことでたくさんの人々を立ち直らせてきた。

その話をする前に、まず初女さんの経歴について語らなくて



はならない。初女さんは青森市に八人姉妹の長女として生まれた。幼いときから、弟妹や友人の面倒をよくみて、どんなことでも親身になって話を聞いてあげる少女だった。五歳のとき、どこから聴こえてくるのか分からない鐘の音に神秘的ものを感じて心引かれる。その鐘は、祖母の家の近所にある青森本町カトリック教会で撞かれていた。

「青森には明治以降、ずいぶんたくさんさんの宣教師がこられて、キリスト教の布教を続けてきた歴史があるんですよ」

初女さんは「誰が鳴らしているのだろう」と、年上の従姉とふたり、幼い足で教会の前まで何度も歩いていったという。しかし、当時は誰も教会の中に呼んでくれる人は現れず、鐘の音はその後もずっと初女さんの中

さとう・はつめ●1921年青森市生まれ、青森技芸学院（現在の明の星高等学校）を卒業。「森のイスキア」を主宰し、悩みや苦しみを抱えて訪れる人々を受け入れてきた。長年の活動によりアメリカ国際ソロプチミスト協会賞、ミキ女性大賞、国際ソロプチミスト女性ボランティア賞、第48回東奥賞などを受賞。『おむすびの祈り』（集英社文庫）など著書多数。



に鳴り響いていた。

一七歳のとき、結核を発症。

たびたび咯血し、明日の命も知れないと思ったときもあったが、それでも初女さんは人の役に立つ仕事がしたいと小学校の教師になった。そこで妻を亡くした校長・佐藤又一氏に出会い、望まれて結婚。佐藤氏には三人の子供がいたが、さらに初女さんは長男の芳信氏を授かった。だがその出産は母子ともに命にかかわると、相談した四人の医師に止められる。悩みは大きかったが、「それは神様のくださったお恵みだから、どうぞ続けてください」という母校のシスター

の言葉を支えとして無事出産。芳信氏が幼いころは、寝たきりの生活が続き、若い母は切ない思いもしたが、幸いなことに全快した。

「そのころはストマイ（ストレプトマイシン）が特效薬と言われていました。ストマイで治った人もいたんですが、私はどうしても薬を信じ切れなかった。それよりも、自分の力になったのは「食」だと思っています。贅沢なものでなく、旬の素材を使って丁寧にこしらえた料理。私は若いころから食べることに、料理することが好きでしたが、やっぱり旬のものを使うとおいしいんですよ」

初女さんは闘病中に、夫の理

解を得て洗礼を受けた。それまでも聖書の言葉を心の支えにしてきたけれど、受洗し、健康を取り戻したことで初女さんの活動の幅が広がっていく。夫の佐藤氏が亡くなったとき、喪失感は大かったが、それをきつかけに、初女さんはより自由に奉仕に生きたいと願うようになったという。

ひたすら 話に耳を傾け 手料理でもてなし

奉仕にもさまざまな形がある。初女さんが「心なら無尽蔵にある」と気づき、生活の中から形作っていったのは人の話に耳を傾けることだった。教会活動を



室内には敬虔なクリスチャンである初女さんらしく、十字架上のキリスト像が掲げられている。支援者から送られた手彫りの観音様やオルガンなども。

熱心に続け、当時女性では珍しかった信徒会長まで務めていた初女さんのもとには、悩みや苦しみを抱えたさまざまな人が訪ねてくるが増えてきた。そこで、自宅を増築し、「弘前イスキア」を主宰したもの、訪れる人はますます多くなっていく。一〇年後にはたくさんさんの支援を得て、自然豊かな岩木山の麓に「森のイスキア」を設立した。

なぜ人々は初女さんのもとにやってくるのだろうか。初女さんが彼らの悩みに解決策を示したわけではない。胸いっぱいたまっている話を静かに聴き、その人があるがままに受け止めて、心を込めて作った料理を食べてもらい、共に過ごすだけ。「おむすび」はその象徴でもある。初女さんが握ったおむすびには、「気」が入っているのだろうか、とてもおいしく、心と身体をよみがえらせる力がある。

初女さんが驚くようなことを言った。

「最近ほ、おむすびを食べたことがないという人がいるんですよ。コンビニで売っているおむ



野菜類は皮むき器などを使わずすべて包丁で丹念にむく。できる限り野菜の命を生かすためだ。おむすびに欠かせない梅干も、ひとつひとつ手で広げて日に干すことでうま味が増していく。



さまざまな漬物作りのための漬物石。漬かり具合によって麴や石の大きさを変え、最もおいしい状態を保つのが初女さんの工夫（上）。

すびなら食べたことがあるんだけれど……」

コンビニエンスストアのおむすびを否定するわけではない。だが、家族、とりわけお母さんが握ってくれたおむすびを食べたことのない子がいるとは。死別・生別したならともかく、いつも一緒に暮らしているなら、遠足や運動会などではにぎって

もらっていたはずだと思い込んでいた。それは甘かったようだ。

「二一三年、自分の今やっていることがこれでいいんだろうか、別の道があるんじゃないか、と悩む若い人がよくこられます。今やっていることを続けていこうとすると、とても体が持たないからやめたい、でも、やめた後何をするかもはつきりしない、という人が随分増えましたね。

これが時代なのかもしれないけれど、私は今の食事が影響しているんじゃないかと思ったの。きちっとした食事を正しく食べてると、芯が丈夫になるでしょう。ちよつと具合が悪いとすぐに薬を飲むとか、栄養剤に頼るっていうようなものは、外部的な治療で、心まで届かない。おなかを満たされて、そのときはいいけれども、芯までは行かない。でも、食事をきちつとしていたら、つらいことにも耐えられるんじゃないでしょうか」

やがて、取材陣のために昼食が用意された。初女さんが前夜から準備したというお昼ご飯。



塩蔵されたものをもどしたわらび、干し鰯とジャガイモ、ふきの煮付け、そして「わっぱ」に移された栗ご飯。どれも手抜きをせず、きちんと下ごしらえがなされている。



その日の献立は、

豆腐と茎わかめの味噌汁

栗ご飯

ジャガイモのコロッケ・キャベツ千切り添え

干し鰯とジャガイモ、ふきの煮付け

わらびのお浸し

胡瓜の粕漬け・赤蕪の千枚漬

け

どれも地元で採れたもののばかり。ふきやわらびは春に収穫したものを塩漬けて貯蔵しておいたのだという。漬け方やもどし方がうまいのだろうか、しゃきしゃきとした歯ごたえがあつておいしい。人工調味料や保存

料と無縁の料理は、身体で沁みて沁みるようだった。

料理の材料は買うものもあるが、多くは届けられたものか送られてきたものだという。おむすびに欠かせない梅干に使う梅は仙台から大量に送られてくる。

初女さんはジャガイモを口に運びながら教えてくれた。

「このジャガイモは小粒でしょ。

こういうのは売り物にならないからって粗末にされているのを見て私が頂いたんです。味は変わらないんですけどね。ここでは皮むき器も使いません。ちっちゃくなってしまっただけでなく、全部包丁で丁寧にむきたい

準備に忙しいスタッフに近寄っていき、きめ細やかに料理の指示をする初女さん。





のです」

「めんどくさい」という言葉が嫌いだという初女さんは、食材を命として扱い、決して手抜きをしない。

死ぬ気できた人が おむすびで 力を取り戻す

「めんどくさい」と思っていたら、奉仕は続けられない。初女さんは苦しい思いを抱えて人が訪ねてくると、たとえ真夜中でも、どれほど疲れているときでも、扉を開けて招き入れてきた。その人にとっては、「今」しかないから。

招き入れられた後、一言も話せない人がいる。思いはあふれんばかりになっているのに、つらい体験を思いが詰まっている人は言葉が出てこないのである。このようなとき初女さんは手作りの料理でもてなし、心を通わせながらそばにいる。人はおいしいと感じたとき心の扉が開くように少しずつ話し始めるという。

「あるとき、中年の男性が来ま

した。すっかり死ぬ気で、仕事や預貯金の整理まで済ませてここに来られたんです。部屋に落ち着いたら、なぜ今のような苦しい思いに至ったかということ話をすばかりで何も食べない。明け方まで話すだけ話して、翌朝起きたときは『もう帰ります』と、私がゆっくり休んでいくように勧めたのをどうしても出て行こうとするのです。そこで私はとりあえずおむすびをにぎり、ちょっとしたおかずを添えて持たせました。

その方はあとから連絡をくれました。電車に乗った

これが有名な「初女さんのおむすび」。硬めに炊いたご飯を蒸らし、ちょうどよい大きさの器に程よく空気を入れるように盛って、専用のまな板にあける。おむすびひとつあたり3分の1個の梅干を入れ、やさしく、ときには氣を入れるようにむすんでいく。黒々とした海苔の香りがぱっと立つ、おいしいそうなおむすびができあがった。

あと、お昼になったのでお弁当の包みを開いたら、オシボリに包まれたおむすびが出てきた。そのぬくもりを感じたとき、『自分のためにこんな心配してくれている人がいるんだ。こんな馬鹿なことをしてはいけない』と、ハッと気づいたそうです。涙がどつとあふれ、そして生きる意欲を取り戻しました。何気

なくした小さなことが心に響いたのだと思います。立ち直られた後、その方は悲嘆や苦しみの中にある人たちのために社会的な活動を立派にやっておられます。その後、その方は『森のイスキア』の支援もしてくださっています」

初女さんはラップやアルミホイルではなく、おむすび大のタ





野菜などは近隣の農家から届けられることも多い。殻がとても固く割るのに苦労する山ぐるみは、丁寧に割って中の実を取り出す。小粒なジャガイモは商品にならないからと粗末にされていたものを、初女さんがもらい受けた。どんなに小さくても、不揃いでも同じ命だと、初女さんは考える。

奉仕の心で明るさと 若々しさを保つ スタッフ

初女さんをボランティアで支えるスタッフの人たちにも話を聞いてみた。神美美さんは初女さんにとっては弟のお嫁さん。夫の死後、初女さんのお手伝いをすることで元気が出たという。「ここにくる人たちが元気を取り戻すのを何度も見てきました。

オルではかほかのおむすびを包む。そうするとほどよく湿気を吸い、おいしく保たれるからである。丸く、黒々と海苔にくるまれたおむすび。中に入っている梅干は、通常の三倍もの赤紫蘇で漬けられていて色鮮やかだ。

分かるんですよ。ぱっと表情が変わるから」

福岡かつさんは、カトリック信者だったことから初女さんと知り合った。老人ホームの職員として働いていたころ、初女さんはその後援会長でもあったという。

「退職した後、人のお役に立ちたいという気持ちが強かったので、ちょうどよくこちらにすることができてよかったと思っています」

松宮文さんは自分でも「森のイスキア」のゲストとして通った時期が二年ほどある。元氣になってから、偶然に初女さんに再会した。

「大阪空港で降りたあと、リムジンバスの中でばったり。スタッフの一員に加えていただきました。このスタッフみんな明るくて楽しいんですよ」

佐藤寿代さんは初女先生の長男芳信氏のお嫁さん。夫を亡くし、子供が進学して家を出ていってから「森のイスキア」に通い始めた。以前から手伝いたいと思っていたが、ようやく自由

大きなちゃぶ台を囲んで「いただきます」と声を揃えて祈るスタッフの人たち。全員が「初女さんのお役に立ちたい」と参加したボランティア。力を合わせて働く姿は生き生きとして、とても明るいことが印象的だ。



「森のイスキア」前で初女さんを囲むスタッフの皆さん。80代の初女さん、70代が3名、50代が2名。全員、年齢より10歳ずつぐらい若く見えるのが不思議。苦しみを背負った人々に奉仕する日々が、スタッフの人たちの心身を支えていることが感じられる。

な時間ができたのだ。

「家にいても、近所の人以外の方と会話することはほとんどありません。ここにくると元氣になれるし、人のお役に立てますから」

川崎留美子さんは仕事を退職してから参加した。

「ここに来てみると、大司教様とか、通常ならお会いできないような方にもお目にかかれます。どんなに苦しみをもって訪ねた人でも、一泊して翌朝先生のおむすびを食べると元氣になるんですよ」

野村繁子さんは初女さんの母



「森のイスキア」にやって来て立ち直った人から贈られた広い浴室。湯段の温泉が引かれ、訪れる人々の心身をほぐす（右）。霊峰・岩木山を御神体とする岩木山神社。この地に古くから残る信仰のあり方を示している（左）。



校である青森明の星高校の後輩にあたる。初女さんは第一期生であり、今も同窓会長を務める。「うちの夫も『森のイスキア』にやってきては草を刈ったり樹木の雪囲いをしたり、外回りの力仕事を手伝ってるんですよ」皆さんが口をそろえて言ったのは、

「ここにくると元気になれる」

八六歳の初女さんは 今日も全国を 飛び回る

ということだった。実際年齢を聞いてびっくり。皆、若いのである。やりがいを持つこと、人の役に立つことはこんなにも自分自身を力づけるのだろうか。「森のイスキア」で働く人たちの姿を見ると、奉仕とは喜びであり楽しいものだと思えてくる。

最近初女さんは全国をまわることが増えてきた。取材の前週も、一週間東京に滞在し、講演などをこなしたという。弘前にいて、人々を迎えたい気持ちはある。だが、全国には初女さんに会いたくても会えないでいる人がたくさんおり、その人たちとも触れ合って自分の考えを伝えたいと出かけている。

「講演が一時間、そのあとの質問コーナーが一時間、本を買ってくださった方へのサインが二時間かかるときもあるのです。そんなときは四時間ぶっとおしになりますね」

疲れはもちろんある。だが、

「5歳のとき、鐘の音に呼ばれて行ったら、神に出逢った」という初女さんは、「森のイスキア」にも鐘がほしいと思い続けてきた。願いが叶って、アメリカのコネチカット州ベツレヘムにあるレジナ・ラウデス修道院からはるばる送られてきたのがこの鐘。当時「自分ではどうすることもできない苦しみを抱えていた」という初女さんに、鐘は大きな力を与えた。今この鐘は訪問客が帰っていくとき、再会を願って鳴らされる。澄んだ鐘の音は、「森のイスキア」を見守るようにそびえる岩木山にも鳴り渡ることだろう。



集まってくれる人のエネルギーが初女さんを支える。

取材を終えた午後四時、帰るときが来た。車に取材陣が乗り込んだとき、軒下に設置されている、アメリカの修道院から贈られたという鐘が鳴り渡った。この鐘は一八一〇年にメキシコ独立を記念して鑄造された由緒あるもので、ゲストが帰るときには必ず鳴らされる。悩みを持って訪ねた人が、帰るときには元気になった後姿を見ながら……。そのときの初女さんの気持ちは、ドイツのローテンブルクの城壁に記された言葉「来るものには安らぎを、帰るものには幸せを」



と同じ、という。森のイスキアを訪れた人の心に、どれほどの音が沁みわたることだろうか。紅葉の岩木山がさらに夕焼けに染まる中、透明な鐘の音が響く。遠ざかる車から「森のイスキア」を振り返ると、初女さんやスタッフの人たちがいつまでも手を振る姿が見えた。